

アメリカメソジスト派の伝道戦略と女子教育

—青山女学院の場合—

The Mission Strategy of American Methodism for Women's Education:
A Case Study of Aoyama Jo Gakuin

大 森 秀 子
(Hideko OMORI)

はじめに

近代日本においてキリスト教学校が外国教派ミッションによって生み出され、教育が伝道的手段として用られたことは周知の通りである。ここには教会サイドからの教育的伝道という発想が含まれ、「伝道を中心目的とし、教育的ということを手段ないし方法とする考え方」が存在する¹。教育的伝道は普通教育が普及し学問の発達によって教育固有の目的が認識されるのに従って、キリスト教学校における伝道と教育との関係を変化させながら、今日に至っている。

高崎毅によれば、日本における初期のキリスト教学校は日本伝道の必要から宣教師の教育活動として始まり、「日本人教職、補助者の養成を目的としたもの」、「日本のインテリ、とくに女性を育てようとしたもの」、「貧民学校・慈善学校を意図したもの」に分類される²。この3種類の学校設立への取り組みは、アメリカのメソジスト監督教会女性海外伝道協会（The Woman's Foreign Missionary Society of the Methodist Episcopal Church; WFMS）も例外でなく、女性宣教師によって目論まれ実践された。青山学院の場合、その初期伝道に現れた諸学校の様子は『青山女学院史』から知ることができる。

女学校は1874年にドーラ・スクーンメーカー（Dora E. Schoonmaker, 1851-1934）によって女子小学校が開かれたことに始まる。翌年、救世学校に改称後、海岸女学校において「慶応義塾をはじめとする男子中等学校と比べても、遜色のない」中等教育が展開され³、キリスト教信仰に基づく教養ある女性の形成が志向された。海岸女学校から青山女学院へと続く流れはキリスト教女子カレッジの実現という東京女子大学設立にまでゆきつく。

女子伝道学校の発端について、当時、女性の牧師は存在しなかったことから、日本メソジスト監督教会婦人年会は女性の伝道者養成学校として1884年に聖經女学校（横浜女子伝道学校）を開校した。その学校は英語名で Deaconesses' Training School, Training School for Bible Women と呼ばれ、ディコネスとバイブル・ウーマンは同義語として用いられている。この流れは1926年の青山学院神学部女子部へとつながった⁴。

貧民学校・慈善学校について、1882年から三田、神田、深川、浅草、築地に順次、開設されたデ

イ・スクールのうち、文部省訓令第12号公布（1899年）後も存続したのは深川と浅草だけであった⁵。貧民学校にはあたらないが、1893年に海岸女学校に開設された幼稚園は東京英和女学校との合併後、青山女学院に引き継がれた。しかし、文部省訓令第12号を機に廃園され、その後、新たな開設と閉鎖を繰り返し⁶、非連続な発展を遂げている。

青山女学院に関する先行研究は、先に示したように教養教育を中心に論じた女子教育研究が主である。たとえば、渡辺良智は教育社会学の観点から、女学校の教育は「男子のように将来の職業活動に直結したもの、立身出世のためのものではなく、より広い教養を与えるものであったから、ミッション・スクールの先進的な教養教育は女子の教育により適合的であったと考えられる。」とし、豊かな家庭環境からの相続文化資本は学歴という獲得文化資本と結びつき、経済資本をもつ男性との結婚機会を高めたとしている⁷。河見誠は、学校史の観点から、東京女子大学創設に伴う英文専門科廃止後の高等女学部専攻科家政科（1921年）、青山学院女子専門部家政科（1933年）の設置を跡づけ、戦前の歩みを全体として教養教育への情熱、キリスト教教育の堅持、女子高等教育の継続という言葉でまとめている⁸。

他方、碓井知鶴子はミッション・スクールの目的に関し、教育勅語の発布後、1890年から1894年にかけて、「従来の伝道者養成を強調した教育目的から、より一般的な良妻賢母養成の目的に切り換え」たことを指摘している⁹。良妻賢母の養成について、キリスト教女学校の精神的基盤とアメリカの母言説に基礎づけられる理想像に注意する必要がある。キリスト教女学校の伝道と教育との関係を考える時、そもそも伝道の中心にある福音を語るという行為は、メソジストの女性やメソジスト系女学校の女性宣教師にとってどのような意味を持っていたのか、また、バイブル・ウーマンの養成を目的とした時代から良妻賢母の教育を目的とする時代へとどのように移行したのかについて、これまでの青山女学院研究では詳しく論じられていない。特に、文部省訓令第12号発令後、キリスト教女学校が宗教教育を理由に各種学校となることを選んだことで、メソジスト女性宣教師による学校伝道の目的にどのような変化が生じたのかについて、十分検証されているとは言い難い。さらに、東京女子大学の創設後、青山女学院において女性の職業と自立に対し、女性宣教師はもとより日本人教師がどのように捉えていたのかについても、実証的に研究されていない。

そこで、本稿では、ジェンダーの視点を導入して、まず、メソディズムにおける女性の位置と19世紀後半以降のアメリカのメソジスト女性の聖職観及びディコネス運動を考察した上で、メソジスト監督教会の日本伝道への影響を探る。次に、青山女学院のケースから、メソジスト派の伝道方針について、幼児・児童の教育を縮小して女子高等教育へと動いていくプロセスを検討し、女性宣教師の描いたクリスチャン・ホーム伝道戦略とその後のキリスト教界の評価を分析する。加えて、教養教育への情熱を傾けたとされる青山女学院の女子高等教育について、キリスト教連合女子大学運動を支援した塚本はま（1866-1941）の家庭観、女性観、職業観を中心に検討する。時代的にはスクーンメーカー帰国後の1880年代から東京女子大学創立後の1920年代前半までを扱う。

1. メソディズムにおける女性の位置

これまでジョン・ウェスレー（John Wesley, 1703-1791）の時代のメソジストの女性を語る時、母のスザンナ・ウェスレー（Susanna Wesley）、ハナ・ボール（Hannah Ball）、サラ・クロスビー（Sarah Crosby）などの名前が挙げられてきた。E.K. ブラウンによれば、18世紀メソジストの女性には10の役割が認められる。それは、福音の公の語り手、クラス・バンドのリーダー、ウェスレー兄弟や男性リーダーに対する助言者、学校の創設者・教師、病人・囚人・背教者への訪問者、牧師の妻、女性支援グループのリーダー、巡回伝道者（itinerants）、後援者、キリスト教生活のモデルである¹⁰。留意すべきは、これらの役割を遂行する上で、メソジスト・コネクションといわれる独自の組織体制の下、女性がソサイエティ、クラス、バンドという一連のシステムの中で活動したことである。

メソジストの女性は、各ソサイエティで組織されるクラスやバンドで話し、祈り、証をし、奨励した。クウェーカーは別として、女性が「福音を語る」という行為は、当時のキリスト教会の慣習に反し、メソジスト運動の内側でも意見が分かれた。しかし、ウェスレーは女性による聖書の解説や釈義が女性集団の中で意味をもつことを認めた。ウェスレーが女性を正式な巡回説教者（itinerating minister）に任命することは決してなかったが、ウェスレーによってクラス・リーダーの力を見出された女性は、巡回伝道者としてウェスレーの旅に同行し、サーキット・ライダーやその妻に招かれてソサイエティを巡回した。メソジストの女性はバンドで女性の必要に応え、女性同士の手紙のやりとりを通して精神的なサポートを行った¹¹。

アメリカのメソジスト監督教会が1784年のクリスマス年会で確立された後、教会における男性と同等の資格が女性サイドから要求されるようになったのは、19世紀中葉である。1869年にマーガレット・コット（Margaret V. Cott）がメソジスト監督教会で地方説教者の資格を得たことが契機となり、4年ごとの総会や地区レベルの年会での女性の投票権に関する議論が活発化した。1888年に総会に正式派遣された4名の女性のうちの1人が、ロックリバー・カンファレンスから参加したフランシス・ウィラード（Frances E. Willard, 1839-1898）であった。総会における女性平信徒の投票権への反対は根強かったが、1906年に承認されている¹²。

ウィラードの聖職観について、N.A. ハーデスティはB. ウェルターの説に従って、ウィラードが「家庭性のカルト」（the cult of domesticity）のレトリックで女性聖職を支持したことを指摘している。彼女にとって牧師職は「母の仕事」として捉えられた。女性の優雅さ、共感、柔和さに着目したウィラードは、女性が信仰の家族における牧師となりうることを示した。ウィラードは女性の模範として、ホーリネス運動の母といわれるフィービ・パーマー（Phoebe Palmer）、救世軍のキャサリン・ブース（Catherine Booth）、その他、ロックフォードのコートストリート・メソジスト教会出身の女性牧師を挙げている。特に、ブースからは女性が神によって公の前で話す卓越した自然の適性を与えられたことを学んだ¹³。ウィラードの家庭性は教会にとどまらない。彼女はノースウェスタン大学女子部長を務めた後、女性キリスト教禁酒同盟（1874年結成）の会長として1879年から

1899年まで活躍したことで有名である。女性キリスト教禁酒同盟のスローガンは「神と家庭と母国のために」であり、全世界が家庭のようになることが彼女の目標であった。アメリカでは1830年代以来、貧困と病気をもたらす男性の飲酒の影響に対しては、宗教的・道徳的動機から読み物などを通して子どもへの予防教育がなされていたが、女性キリスト教禁酒同盟は禁酒法や女性参政権の成立に向かって運動するだけでなく、公立学校における禁酒教育の徹底をはじめとして、「何でもやってやろう」をモットーに運動を拡大し、家庭保護、幼稚園の開設、女性労働者の労働環境の改善、失業者の保護などを行っている¹⁴。

ところで、メソジスト監督教会の女性グループは、19世紀後半にメソジスト監督教会女性海外伝道協会 (WFMS)、並びにその相補団体として、女性国内伝道協会 (The Woman's Home Missionary Society of the Methodist Episcopal Church; WHMS) を組織した。WFMS はインドで宣教活動した宣教師の妻の熱情から、1869年にボストンのトレモント・ストリート教会において誕生した。そのいきさつは、ローイス・パーカー (Lois Parker) とクレメンティナ・バトラー (Clementina Butler) の2人の女性が、インドのヒンドゥー・ジェンダー・イデオロギーに縛られた女性に対して、男性宣教師の力では及ばず、女性だけが女性に接近できるという経験から、フランダース夫人 (Mrs. Lewis Flanders) の協力を得て、8名で組織が立ち上がった¹⁵。創設されて1年も経たないうちに、インドにイザベラ・ソバーン (Isabella Thoburn) とクララ・スウェイン (Clara Swain) の2名の独身女性宣教師が派遣されている¹⁶。日本の場合、WFMS がメソジスト監督教会伝道協会 (Missionary Society of the Methodist Episcopal Church) の監督・管理下に入る1884年まで、派遣された女性宣教師は「独身女性に限られ、宣教師の夫人の任用が無かった」¹⁷。

1880年に結成されたアメリカ本国の WHMS は、海外の異教世界だけでなく、国内の新規移民の置かれた状況に目を向けた。ポーランド人、イタリア人、リトアニア人、ボヘミア人、ロシア人、アイルランド人、トルコ人といったニューカマーの宗教はプロテスタントではなかったために、プロテスタント教会は外国生まれの人々を置き去りにし、移民の密集する地区で奉仕する人はほとんどいなかった。こうした中で、教会の内外において女性の担う役割が自覚され、メソジストの女性は人々の欠乏と苦しみに寄り添った。

ディコネス (deaconess) は一般的に女性執事、女性奉仕団員と訳され、男性のディーコン (deacon) に対照される。聖書の典拠はローマの信徒への手紙16章1 - 2節である。パウロはキリストにある姉妹フェベをディアコノス (diakonos) と呼び、「多くの人々の援助者」とみなした。不道德なコリントの郊外でフェベが病人や痛みのある人々になした奉仕は、後のメソジストの女性たちによって19世紀後半アメリカの都市産業社会における奉仕の模範と捉えられた¹⁸。

ルーシー・ライダー・マイヤー (Lucy Rider Meyer, 1849-1922) はアメリカでメソディズムのディコネス運動を展開した第一世代である。マイヤーがシカゴに到着した新規移民に対して気がついたことは、民族グループは地区ごとに固まる傾向があること、英語がしゃべれないこと、母国語で新聞を読むこと、出身国の異教徒の習慣を維持していることであった。他方、メソジストの女性教会

員数は男性を上回っていた。都市化・工業化するアメリカ社会で、農園の所有や経営は不安定になり、女性が農園で働く女性として結婚できる見通しは崩壊し、田舎から都市へ出てきた独身女性にとってディコネスは職業選択の一つであった。彼女らがディコネスを自らの召命として受け止め、献身することは少なくなかった¹⁹。

マイヤーは女性が伝道と奉仕に必要な技術やリーダーシップを訓練する必要があると判断し、1885年にシカゴ・トレーニング・スクール（Chicago Training School for City, Home and Foreign Missions）を開設した。それはシカゴの都市伝道・家庭伝道だけでなく、海外伝道のための指導も含んでいた。当時、看護婦養成や教員養成の大半は1年課程であったが、このトレーニング・スクールは2年課程で、聖書研究・教会史はもとより、医学も差し出した。開校して1年目に学生は伝道実践する中で、学生自らが実業学校（industrial school）を開いたことが報告されている。スタッフとして協力した人の中に、インド伝道から一時帰国したソバーンやハル・ハウスのジェーン・アダムズ（Jane Addams, 1860-1935）の名前が認められる。アダムズは「幼稚園の原理と粘土細工」を未来のディコネスに指導したことが記録されている²⁰。

シカゴ・トレーニング・スクールは男性にとっての神学校とは性格を異にする、女性伝道者養成所のモデルとなり、そこから託児所、幼稚園、デイ・スクール、看護プログラムなどを兼ね備えた施設が生み出された。1888年にオハイオ州のシンシナティに開設されたエリザベス・ガンブル・ディコネス・ホーム（後のシンシナティ・ミッショナリー・トレーニング・スクール）をみると、1898年の時点でディコネス用寝室15部屋、読書室、託児室、幼稚園、デイ・スクール、裁縫室、ホームレスのための部屋、エップワース・ホール、伝道室、食堂、浴室が設置され、病院も併設されている²¹。

メソジスト監督教会において正式にディコネスが認可されたのは、1888年である。第一世代のディコネスは独身で、ディコネスホームで共同生活をなし、黒のドレスと帽子、リネンの襟と袖口のひだ飾りという一定の服装を着用して無償奉仕を行ったところに特徴がある²²。ディコネスはカトリックの修道女に類似しているが、両者は区別される。語源的にディコネスはギリシャ語由来の奉仕者（servant）を意味し、修道女はエジプト語由来の聖女を意味する。第一次世界大戦後の第二世代になると、「フラッパー」の生活スタイルが広がり、ディコネスの新しいモデルが示されるようになる。つまり、共同生活の理想から離れてディコネスホームは閉鎖され、ディコネスは独身、既婚にかかわらず、女性の伝道奉仕者を意味する言葉として用いられることになった²³。

2. メソジスト監督教会女性海外伝道協会の日本伝道における家庭性

スクーンメーカー校長時代の海岸女学校の一つの目標は、家庭性に裏づけられた有能なクリスチャンの母・妻を創出することであった。寄宿舎学校において「独身宣教師たちは、自分の学校を家庭に見立て、自分はクリスチャン・ホームの母の役を演じ」²⁴、女学生をしてクリスチャン・ホームの担い手となることを目指した。1879年のスクーンメーカー帰国後も家政を担うよき家庭人の育

成が図られた。

第3回日本メソジスト監督教会婦人年会記録（以下、年会記録）（1886年）をみると、アンナ・アトキンソン（Anna P. Atkinson, 1860-1958）、レベッカ・ワトソン（Rebecca J. Watson, 1856-1930）、マチルダ・スペンサー（Matilda A. Spencer, 1848-1933）は、「聖書教授が毎日どの学年の生徒にも授けられ、裁縫・料理が規則正しく教えられているが、我々の目的は少女をよき生徒、能力あるクリスチャン・ワーカーになさしめるというだけでなく、やがて有能なハウスキーパー、よき妻・母となる女性らしい女性にすることである。」²⁵と報告している。この記事から、海岸女学校のもう一つの目標が浮き彫りとなる。それは、卒業後へと続くクリスチャン・ワーカーを育てることである。シカゴ・トレーニング・スクールで訓練を受けた後、日本に派遣され、1887年から1892年に海岸女学校及び東京英和女学校で音楽の教鞭を執ったメアリ・ヴァンス（Mary A. Vance, 1858-1892）の場合、教師の立場から王女会の活動などを通して女学生を日曜日に子どもたちのために奉仕する働きへと導いたことが注目される²⁶。こうした女性宣教師の活動はディコネス（バイブル・ウーマン）という将来像を見据えての働きであった。

元来、インド・中国といったアジア伝道におけるディコネスの使命は異教地の「残酷な慣習を打破し、重荷を取除く方法を同性の婦人達に教えること」であり、トレーニング・スクールはそれに従事できる女性、また、デイ・スクールの教師を育てるところに主眼があった²⁷。第5回年会記録（1888年）によれば、バイブル・トレーニング・スクールは横浜だけでなく、東京と長崎においても設置されている。学生数は横浜29名に対し、東京7名、長崎10名の在籍者であり、経済的支援を受けた者が横浜22名、東京3名、長崎2名となっている²⁸。東京トレーニング・スクールは1890年を最後に統計表から消えているため²⁹、その実態は定かではないが、スペンサーがバイブル・ウーマンの育成に尽力したようにみえる³⁰。バイブル・ウーマンが大きな働きをなした場合はデイ・スクールや日曜学校である。子ども会や聖書クラスの指導、児童の家庭訪問などを通して地域ベースで活動がなされた。第7回年会記録（1890年）には、「日本メソジスト監督教会婦人年会規約」の第2条（目的）に「その目的は、女性海外伝道協会の代表者、親伝道局の女性、日本人ディコネスが協力して、日本の女性と子どものために最善可能な利益に資することである。」³¹と記されている。メソジスト女性宣教師の伝道対象は女性と子どもという弱き者に向けられ、伝道と奉仕に献身する日本人ディコネスとの共同の働きが期待された。

1888年に海岸女学校の上級生が東京英和女学校へと転出した後、1895年に青山女学院が誕生するまでの東京英和女学校時代に特筆すべきは、1890年に始まる手芸教室から、ハリス記念実業学校がエラ・ブラックストック（Ella Blackstock）によって麻布に開設され、翌年、青山へ移転後、職業部として運営されたことである。その後、政府認可の必要性から、1899年に各種学校となった青山女子手芸学校はその目的を手芸教師の養成や花嫁修業へと転じている³²。

さて、文部省訓令第12号と私立学校令が同時公布された同じ年に、高等女学校令が制定され、天皇制国家体制下において良妻賢母主義教育が推進された。この時期にメソジストの伝道方針として

ミッション・スクールによるクリスチャン・ホームの形成がより強く打ち出されている。その年の第16回年会記録に、遺愛女学校長オーガスタ・ディッカーソン（Augusta Dickerson, 1859-1946）が「伝道地における学校」と題して、次の記事を寄せている。

ジョン・ウェスレーは「世界はわが教区なり」という。……我々はメソディズムが大学で誕生したことを思い出す時、メソジスト教会がこの注目すべき19世紀の伝道機関であると同様に、偉大な教育機関の一つであることを不思議に思うことはない。教会と学校は並んで立ち、共に天を仰いで心を砕き、彷徨う足を正しき道へと導く。……

現在、クリスチャン・ホームは日本全国の暗闇を照らす光を放っている。クリスチャン・ホームはキリスト教のミッション・スクールなくして、決して実現することはないだろう。

我々の学校、デイ・スクール、神学校には知的で献身的なクリスチャン教師がおり、彼らは教訓と実例によってキリストの救いのすばらしい真理を教えている。これは我々のキリスト教のミッション・スクールなくして実現することのできない必要条件である³³。

女性宣教師にとってデイ・スクール、幼稚園は教育機関である以上に宗教機関（a religious agency）³⁴であった。しかしながら、それらの機関の閉鎖が続く中、母親をサポートし指導する体制が求められるようになる。第16回（1899年）・第17回（1900年）の年会記録におけるチャペル夫人（Mrs. B.Chappell）³⁵の報告によれば、東京では三田、四谷、青山に母の会が形成され、三田はファニー・ウィルソン（Fanny G. Wilson, 1868-1957）、青山はチャペル夫人、四谷は両人が協力指導している。伝道対象となる日本女性は地区の性格によって階層格差が認められる。四谷母の会には慈善学校（デイ・スクール）に通う貧困家庭の無学な母親20名が参加し、四谷教会の王女会が支援している。そこでは宗教教授、衛生学・育児の指導が行われ、デイ・スクールの教師と一緒に支援者1～2名がホスト役となり、年2回午餐会が開催された。青山母の会では、キリスト教寄宿舎学校の卒業生、教育を受けた女性、女教師、専門職男性の妻、女性博愛家が参加した。そこでは「若き児童のケア、子どもをいたずらから守ること、親への尊敬」といった主題が取り上げられている。たとえば、赤坂病院看護婦の伊藤は「子どもに対する母の務め」、子どもの身体の必要や衛生の話をしている³⁶。こうしたことからメソジスト女性宣教師は母の論理で伝道活動を行ったことがわかる。

青山女学院のエリザベス・ベンダー（Elizabeth R. Bender, 1858-1942）は第16回年会のカンファレンス・ペーパーで、卒業後、結婚を望まない女性が存在することを承知しながらも、「我々の少女が最も高尚な幸福と成功を得るであろう生活領域に関して、伝道的手段（an evangelizing agency）としてのクリスチャン・ホームの影響を考慮し、最も崇高な個人生活を発展させる点において、寄宿舎学校卒業後、彼女らに対しクリスチャン・ホームが目論まれるべきだということに躊躇しない。」と述べ、結婚への女性宣教師の介入の必要性を説いている。加えて、ベンダーは同

窓会を確立し、卒業後も生徒が学校につながることを奨励し、月1回の聖書・英語クラスの設置などが提案されている³⁷。

日露戦争後の当時の女学院の状況について、英文専門科が専門学校令によって認可された1904年から英文学・英文法・西洋美術を担当した舟橋雄は、次のように回顧している。

私の長い外国留学のうちに痛感した事は一二に止まりませんが、特に米国の様な、女子の才能が十分に認められ、社会の各方面も毫も男子と違はずに活動してゐる国柄の有様を見て、我国の婦人にもどうか十分其天分を伸す機会を与へ度く、其因循姑息な状態を脱却して、広い天地に神が意図された、自由な生を享受する同胞姉妹を我周囲に見出したいものだと私の胸に自然に育つた希望でありました。丁度私の帰朝当時は日露戦争がまだ終りを告げず、とかく国家的意義の強いまゝに、国民としては世界大の理想を養ふに不便多く、女子教育の方針も亦動もすれば保守的に、我国の美風を保存する一方に傾き勝ちでありました。戦後の情勢の中から生れたのが、即ち良妻賢母主義と申す女子教育の方針でした。これでは折角解放されかけた我国の婦人に、強て家庭内に逆戻りをさせるより外なき世間の有様でありましたが、せめて基督教主義を標榜する学校に於ては、何とかして、全人類を念とする広い高い理想を与へ度ものと私共は焦慮したにも拘らず、女学院の如きは、校長を初めとして、何故か日本主義とか日本趣味とかいふ事を唱へ、やはり在来の淑女風にのみ育てんとする傾向がありましたのは、私共にとつて少なからぬ心配の種でした³⁸。

この舟橋の言葉は、女性宣教師のクリスチャン・ホームの再生産による伝道論に対して、品性ある家庭的な女性にとどまらない、より自由な生き方へと促す女子教育への発展を期待したものと受け止めることができる。

3. 青山女学院における女子高等教育の展望

日本におけるキリスト教大学構想は開教五十年記念会（1909年）、並びにエディンバラ世界宣教会議（1910年）で超教派の総合大学の設置が提案されたことが契機となっている。開教五十年記念会は文部省訓令第12号発令の10年後の開催であり、10月5日から10日までの6日間、テーマ別に分かれて第1講演会から第10講演会が行われた。女性をめぐる伝道と教育の問題は10月7日の第4講演会において議論され、『開教五十年記念講演集 付祝典記録』には13の講演が採録されている。そのうち、神戸女学院のスーザン・ソール（Susan A. Searle, 1858-1951）は、女学生の大半がクリスチャンになって卒業するものの、ほとんどが教会から離れている点を指摘した³⁹。このことは20世紀転換期に女性宣教師の描いたクリスチャン・ファミリーが実際に形成されていないことを表している。さらに、2人の女性宣教師によるキリスト教女学校の自己分析とその後の方針を確認したい。まず、広島英和女学校長のナニー・ゲーンズ（Narrie B. Gaines, 1860-1932）はキリスト教女

学校の今後の方針を次のように述べている。

ミッション・スクールの将来の方針は日本教育界の方針や国民の要求に伴って更に拡張されなければなりません。教育の標準も最早自分達の立てたものに拠らずに政府の定めた標準に適合させなければなりません。

教育が普及した土地に在つては、伝道は最早ミッション、スクールの為めの伝道ではないといふ事は茲に考へなければならぬ問題で御座います。

もしミッション、スクールがその教授力に於て政府の直轄学校と同等になる事も出来ず、日本語を以て、同様に生徒を教育する事も出来ないの御座いますならば、ミッション、スクールはその目的とするものが何んで御座いませうとも、殆んど不必要なもので、親達も敢えてミッション、スクールにその娘を托しはしないでせう。日本語の科目が政府直轄の学校と同じ程度であるならば、英語や音楽の科目は普通の政府直轄の学校の夫れよりも更に程度が高くなければなりません。……

……ミッション、スクールが日本の教育界に感化を占めやうとするならば、辿るべき路はこの一つしかないやうで御座います。政府の認定をおうけなさい。政府の認定がなくては如何にその仕事が善良な仕事でありまして、教師は教育界の指導者として立つ事が出来ません。……これが少しも宗教の自由を犠牲にせずとも得られる事を示して居ります。で御座いますから、凡てのミッション、スクールは政府の認定を受けて高等女学校杯と対等の位置を取つた方が賢い仕方ではなからうかと存じます⁴⁰。

ここではキリスト教女学校の教育が伝道のためのものでなくなったこと、英語と音楽の教育の程度を公立学校より高度なものにすべきこと、政府の認定を受けて高等女学校かこれと同等以上の指定を受けた学校となり、卒業生が教員検定試験を受験できるようにすることが提案されている。この意見はすでに前年に京浜地区のキリスト教女学校長会議で話し合われたことでもあった⁴¹。

他方、当時、青山女学院長のエイミー・ルイス（Amy G. Lewis, 1874-1934）は20数年の間に、キリスト教女学校の教育によって日本の女性に生まれた変化を次のように述べている。（ルビは省略）

……種々な人の意見を聞きますと、家庭は、純潔にして且つ底ひ知れざる愛情の上に基礎を置かれたいとか、又人に依つては教育及び博愛な事業のためには、生涯結婚せずに其身を捧げるほどの婦人が、日本にも必要だと云ふことを伺ひます。斯う比較しますれば、私共は此所僅か二十有余年間に、婦人に対する理想が、如何に甚しき変化を来したかと云ふことが解ります。第一流の教育者達が妙齡の女子を戒しめて、若い男子とは相当な監視者か、若くは陪伴者がなければ交際しないやうにと云ふ訓戒を、作る必要を見るに至りましたのも、今日の女子の実際の位置境遇が、其母親や祖母の時代のとは全く異つて来た為めであると云ふことが解ります。

西洋の教育や理想を引き入れて来たこと、それには私共の宗教学校は少からず与かつて力があるのですが、其教育や理想が、此現時の勢を来した所以であります、……⁴²

具体的に、ルイスは日本女性の中に純潔で愛情の上に築かれる家庭観を醸成したこと、結婚しないで教育事業や博愛事業に献身する女性のライフ・コースが求められるようになったこと、男女交際のルールが浸透したことを評価し、さらに女性の能力を発達させるために女子高等教育が必要であることを力説した。

其理想を示すばかりでなく、彼等がそれを実現し得るやうな力を開発して行くことが私共の義務であります。耶蘇基督が救つて下さるといふ事を知るばかりでは、亦それを口にするばかりでは、充分ではありません。……私共は彼等の思想感情を導くばかりでなく、此新生涯を支配して行くに足るだけの、充分強固なる意思と、判断力を開発せなければなりません。……

高等女学校の学科は、斯る能力を発達せしむるに果して充分なものと云へませうか、私共は決して然う思ひません。婦人に対する高等教育の必要なることは、最早日本の第一流の教育者達に依って実行せられて居りますし。世人一般の意向も確かに亦それを認めてをります。私共は此意向を大切に育てあげて、必要に応じて、何時でも速かに、間に合ふやうにして置かなければなりません⁴³。

翌年、エディンバラ世界宣教会議では、具体的に「女子高等教育については目下、できれば二つのキリスト教学校を必要とする。その一つは当然東京に置かれるべきである。他のキリスト教女学校は現段階ではこの2校の行く高等教育 (the higher grade) の事業に着手すべきではない。」⁴⁴と決議し、その後すぐに、ジョン・モット (John R. Mott) を委員長とする継続委員会が設置され、1912年12月にアメリカにおいて正式に、女子大学をつくるための促進委員会が設けられた。最終的に6ミッションが支援し、その傘下にある女学校が協力して、新渡戸稲造を学長、安井てつ (1870-1945) を学監とする東京女子大学が1918年4月に開校した。創設時から東京女子大学は、いわゆるリベラル・アーツに重きをおく、人格教育を展開した。ここには安井の経験と学問観が反映されたといわれている。柴沼晶子は1930年代の学科設置について、経営上、理事会で栄養科の設置案が浮上した時、安井の反対により不発に終わったことを、安井が喜んだというエピソードを取り上げている。また、「中等教員資格無試験検定の認可をめぐる職業教育に対する警戒も、安井のリベラル・カレッジの志向の強さを示している」ことが指摘された点は、東京女子大学の教養主義を物語っている⁴⁵。

4. 塚本はまの家庭観・女性観・職業観

青山女学院においてキリスト教連合女子大学運動で主導的役割を果たしたのは、1914年5月に校

長に就任したアルバータ・スプロールズ（Alberta B. Sprowles, 1872-1859）である。スプロールズを助け、この運動を支援したのが、同年4月に高等女学部教頭に就任した塚本はまでであった。塚本は1911年以来、青山女学院の家事・国語・修身を担当し、1923年まで奉職した⁴⁶。1920年に英文専門科を失った青山女学院は⁴⁷、翌年、高等女学部専攻科として2年課程の家政科を置いた。一連の流れの中で、塚本の担った役割は大きかった。

塚本の経歴について述べれば、東京女子師範学校が東京師範学校に合併され、女子部になった1885年に県費生として入学した。1887年に女子部から選抜された13名の1人として高等師範科に進み、独立した東京女子高等師範学校を1890年に卒業した。安井や野口幽香は同期の第1回生卒業生である。当時、欧化主義を背景に森有礼文相によって師範教育が重視された時代であった。洋服を着用し、寄宿舎は西洋式で、ダンスの練習や舞踏会への参加があり、英語教育は外国人教師の他に、高嶺秀夫からも指導を受けている。「完全な共学ではなかったものの、男子と同じ先生によって、同じ教室で教授され」、塚本は能力の発達において男女差のないことを体験した。師範学校卒業後、大阪師範学校女子部に教諭兼舎監として務めた塚本は結婚後も、職業婦人として活躍している。信仰面では、1888年以前に本郷教会で洗礼を受けている⁴⁸。本郷教会はその草創期に東京帝国大学や東京女子高等師範学校といった学生青年が集う教会⁴⁹として知られ、後に大正デモクラシーの担い手となった吉野作造などに影響を与えている。1919年から塚本は工場地帯で吉野と共に社会活動を行い、産院や看護婦養成の学校設立などに尽力した⁵⁰。

ところで、塚本の著書『家事教本』（1900年）は当時、最新の科学に裏打ちされた高等女学校の家事教科書と評価され、その後も、塚本は次々と創意工夫した教科書を出版した。育児に関し、教頭時代の1918年にキリスト教伝道義会で「家庭教育」と題した講演がある。塚本は「人間に魂を入れる」教育について、次のように述べている。

教育家ロックのところへ二歳になる赤坊を抱いた奥さんが見えて、此れは私の子供ですが、何時から教育を始めたら宜う御座いませうと問ひましたら、ロックの言ふには、それは惜しいことをした。貴方の子供はもう二年だけ教育が遅れてゐると返答されました。これはロックの教育書に書いてあります。面白い話です。教育は技術ではない。先生が教授法が上手なので、能く教へ込まれたとか、裁縫の先生が技術が巧いので、裁縫が能く教へられたとか、体操も音楽も先生が宜くて、生徒の技術が非常によく上達したと云ふようなことも結構ではあるが、それは単に技術に関することで、家庭の教育とは全然意味が違つてゐます。此の技術の教育では人間に魂を入れることは出来ません。

学校の先生は家庭の先生にはなれません。家庭の教育は母親の任務であります。子供は最も接近してゐるものから影響を受けるのですから単に母親ばかりでなく、父親にも大なる責任があります。否両親ばかりでなく、家族のもの全体にも責任があります。……人間性を有つてゐる小さな小供がいろ／＼な感化を受けて出来上るので、何んな性質でも、その子供の精神のう

ちに溶け込んで、一つになつて出来上るのですから、よく／＼考へれば家庭教育は恐ろしいものです⁵¹。

塚本は家庭教育が母親の役割でありながら、独占するものでないという立場に立ち、ロックの精神白紙説に従って、家庭における子どもへの精神的な影響、とりわけ両親の責任を力説している。さらに、技術偏重の教育を斥け、教育の方法を支える原理として、鍛錬と個性を挙げ、「子供の持つて生れた思考力は、どうしても子供自身に経験をさせ、自分で実現させるやうに仕向けねばなりません。」「母親がついてゐて、子供を監督して、余り世話を焼かずに、その子供の持つて生まれた個人性を、殺がないやうに發育させて行けば宜いのです。」と述べている⁵²。この講演はキリスト教的見地からというより、一般的な教育見地から論じられている。

塚本の教育の特色は家事・家政に関するものばかりではなく、女学生が新聞雑誌を通して専門の知識を得ていくことを奨励した点が刮目される。塚本は高等女学校が拡大したにもかかわらず、高等女学校の卒業生に新聞を読み分ける力がないことを批判している。『婦人公論』に紹介した青山女学院の方法は、「各自生徒に家庭にある新聞をまづ一週間に一回位日を定めて精読させ、心に止まつた事がらを簡約に摘録させたり、其中に十分理解し得られない詞や事がらを摘記させて、これを教室の周囲の黒板に書かせて、一週間位の間他の生徒にもこれを研究させたり考へさせたりして後、書いた本人に説明させ、他の人々にも批評なり助言なりするといふ風に、なるだけ自由作業、自由討論といった形でしらせ、」現実社会への関心や物事に対する批判的な精神を養うという学習方法であつた⁵³。

塚本にとって家庭は女性の領域であつたが、夫に依存することは退けられる。女性の家庭性は経済的独立と両立するものであり、教育を受けた女性の精神的経済的自立が主張されている。塚本は婦人講話会で「経済上独立せる婦人」と題して自らの見解を、次のように示している。

婦人は子供を育てねばならぬから其務を全うするには他人から養つてもらはねばならぬと云ふかも知れませんが、然し其は或時期の間であつて一生を通じてかくあるべきではなからうと理解されます。それで私は教育は男女の区別身分の上下金銭の有無に頓着なく正當に自分を引き廻はして行く事が出来、自分が生存するだけの養を自ら収入が本体ではなからうかと云ふ氣持が起るのであります。……

我々婦人が劣つて居るといふは男子の保護に甘んじ責任を持たぬ結果であつて一寸見は幸福のやうでも其幸福たるや籠に飼はれた鶯と同様なものであります。

私共が世の中に起ち生存を維持して行くに苦楽他人に依る主義は教育の意義に背き又教育の意味を低下させる様な仕方であることを悟れば、経済上の独立は自らなし得るやうにならねばなりません。これは金満家も貧乏人も何の異なる事ありません⁵⁴。

青山女学院退職後、塚本は内務省社会局勤儉奨励婦人団体委員、農商務省商工局世帯会理事、文部省生活改善同盟会理事となり、関東大震災後は東京連合婦人会、日本婦人平和協会で活動した。彼女の生活改善の講演は全国に及び、その講演目的は第一次世界大戦後の家庭教育、家庭能率増進及び家庭経済の合理化に置かれた⁵⁵。校友の末次富士子は追悼文で、「私は省みて今日先生のこの礎石があつたればこそ、日本の女が父祖伝来の和服も易々と洋服に脱ぎ更え、二丈の書夜帯も一丈五尺の名古屋帯に更えて楽々となる。衣服の大革命であると共にその精神的自由性も誰が植へつけたか、実に先生の力の偉大性を思ふのであります。」⁵⁶と述べ、経済的見地から合理的な生活様式に即した家庭生活の改善を促した塚本の功績が記されている。

おわりに

すでにみたように、アメリカの代表的なメソジスト女性であるウィラードにとって女性聖職は男性と同様の福音の語り手であるだけでなく、母の仕事を担うものであった。初期のディコネス運動は未婚の女性による伝道・奉仕活動として展開され、ディコネス・ホームを母体とする日曜学校、幼稚園、デイ・スクール、保育・看護プログラム、実業学校が組織された。青山女学院のケースをみると、女学校の教育は創立当初から、家庭性のカルトと結びついた教養ある女性が目指され、アメリカのディコネス運動はメソジスト監督教会の日本伝道においてデイ・スクールや日曜学校などで奉仕するバイブル・ウーマンの養成に一つのモデルを提供した。文部省訓令第12号発令以降、子どもを対象とする学校伝道が後退したのに対し、母の会の活動が奨励され、結婚を前提としたクリスチャン・ホーム伝道戦略が前面に押し出された。この戦略は「女性のための女性の仕事」として福音化と文明化を目指すものであったが⁵⁷、卒業後、可視化されたりスチャン・ファミリーを創出することにつながらなかった。伝道のための教育は開教五十年記念会以降、教育に基礎づけられた伝道へと方向転換し、女子高等教育の実現へと前進した。エディンバラ世界宣教会議後、青山女学院はキリスト教連合女子大学運動に参画する中、1914年に青山手芸学校を青山女学院手芸部に統合し、東京女子大学創立後、高等女学部専攻科家政科を設置した。ここにおいて創設以来の青山女学院の教養教育観に職業教育的要素が加えられた。

千住克己によれば、近代日本の女子教育には三つの型がある。第一に教養中心の人間教育に主眼をおくもの、第二に家庭的実科技芸を中心とするもの、第三に家庭的実科の技芸を、豊かな教養を裏づけとする科学的・合理的知性をもって処理していこうとする三つである。青山女学院で教頭を務めた塚本は、第三の推進者であった⁵⁸。塚本は男女同等に基づく経済的精神的に自立した妻・母という女性観を支持し、家庭教育における子どもの親の務め、家庭生活の合理的な生活改善を主張した。塚本の家庭観・女性観・職業観に基づく教育は東京女子大学の安井の教養主義との相違がみられ、1933年の青山学院女子専門部における家政科設置への道を備えた。この流れは、1920年代に世界親善をスローガンにした WFMS が奉仕・平和・社会主義の連帯へと向かう運動の中で⁵⁹、日本の女子高等教育、特に専門教育にどのように取り組もうとしていたのかについて、検討の余地があ

る。

最後に、1928年に開催されたエルサレム世界宣教会議の結果について、東洋のキリスト教学校の問題として、包括的プランがなく、停滞性をもっていると指摘された点⁶⁰を、その後の日米合同委員会による調査報告書で示された女子高等教育のプラン⁶¹もあわせて判断すると、伝道地日本における女子高等教育の教養教育と専門職業教育の新たな包括的なヴィジョンは戦後を待たねばならなかった。

註

- 1 西谷幸介「日本の神学における＜教育＞の論議」学校伝道研究会編『教育の神学』（ヨルダン社、1987年）、110頁。
- 2 高崎毅「ミッション論とキリスト教学校」『現代日本におけるキリスト教学校教育の意義—内外協力会キリスト教学校教育調査研究報告書—』（内外協力会、1971年）、239-240頁。
- 3 齋藤元子「海岸女学校—青山学院の源流—」築地居留地研究会編『近代文化の原点—築地居留地—』Vol.3（築地居留地研究会、2004年）、97頁。齋藤は1897年にジョージアナ・ボーカス（Goergiana Baucus）によって設立された常磐社の雑誌『常磐』の分析を通して、メソジスト女性宣教師が日本女性にキリスト教信仰に基づく生活を提示したことを明らかにし、その内容が料理・育児・衛生・文学・旅行などを扱い、出版条例に基づく雑誌の性格から時事問題を論じなかったことを指摘している（齋藤元子『女性宣教師の日本探訪記—明治期における米国メソジスト教会の海外伝道—』[新教出版社、2009年]、152頁、177-191頁。）
- 4 *Minutes of The Fifth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1888), p.35, p.41.（青山学院資料センター所蔵）本多繁「メソヂスト監督教会婦人外国宣教協会と明治前期に於ける日本での活動—東北地方を中心として—」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第17号（1985年7月）、22-23頁参照。
- 5 青山さゆり会編『青山女学院史』（青山さゆり会、1973年）、46頁。中村早苗「米国のメソジスト監督派教会女性海外伝道協会によるデイ・スクールの教育活動—東京府の齋田小学校を中心に—」『キリスト教史学』第72集（2018年7月）、138頁。
- 6 青山さゆり会編、前掲書、149-152頁。中村早苗「戦前のキリスト教主義学校に存在した2つの幼稚園とその保育者たち—海岸女学校附属幼稚園と青山学院緑岡幼稚園における幼児教育—」『幼児教育史研究』第14号（2019年）、15-29頁。
- 7 渡辺良智「ミッション・スクールの女子教育に関する一考察」『青山学院女子短期大学紀要』第62巻（2008年12月）、141-167頁。
- 8 河見誠「青山女学院の女子高等教育—その歩みと基本姿勢—」『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報』第17号（2010年3月）、3-14頁。
- 9 碓井知鶴子『女子教育の近代と現代—日米の比較教育学的試論—』（近代文藝社、1994年）、39-40頁。
- 10 Earl Kent Brown, "Women of the word," in Hilah E. Thomas and Rosemary Skinner Keller eds. *Women in New Worlds* (Nashville: Abingdon, 1981), p.70.
- 11 *Ibid.*, pp.73-77, pp.82-83
- 12 Rosemary Skinner Keller, "Creating a sphere for women," in Thomas and Keller eds., *op.cit.*, pp.248-250.
- 13 Nancy A. Hardesty, "Minister as prophet? Or as mother," in Thomas and Keller eds., *op.cit.*, p.93, pp.96-98.
- 14 栗原涼子『アメリカ第一波フェミニズム運動』（ドメス出版、2009年）、47-70頁。
- 15 Dana L. Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* (Macon:

- Mercer University Press, 1997), p.138.
- 16 Keller, *op.cit.*, p.250. スウェインはアメリカから東洋へ派遣された最初の女性医療宣教師である。
- 17 本多前掲論文、11頁。
- 18 Mary Agnes Dougherty, *My Calling to Fulfill: Deaconesses in the United Methodist Tradition* (New York: General Board of Global Ministries, The United Methodist Church, 1997), pp.3-5.
- 19 *Ibid.*, pp.6-8.
- 20 *Ibid.*, pp.94-95, pp.100-102.
- 21 *Ibid.*, p.108.
- 22 Russell, E. Richey, Kenneth E. Row, and Jean Miller Schmidt, *The Methodist Experience in America: A Sourcebook*, Vol. II (Nashville: Abingdon Press, 2000), pp.432-434.
- 23 Dougherty, *op.cit.*, pp.11-19
- 24 棚村恵子『しなやかに夢を生きる—青山学院の歴史を拓いた人 ドーラ・E・スクーンメーカーの生涯—』（青山学院、2004年）、175頁。
- 25 *Minutes of The Third Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Yokohama: Japan Publishing Agency of The Methodist Episcopal Church, 1886), p.17. (青山学院資料センター所蔵)
- 26 *Minutes of The Seventh Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (Tokyo: Kokubunsha, 1890), p.25. (青山学院資料センター所蔵)
- 27 青山さゆり会編、前掲書、40-42頁。
- 28 *Minutes of The Fifth Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan*, Statistical Report for 1888.
- 29 *Minutes of The Seventh Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan*, Statistical Report for 1890.
- 30 青山さゆり会編、前掲書、42頁。
- 31 *Minutes of The Seventh Session of The Woman's Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan*, p.1.
- 32 青山さゆり会編、前掲書、127-129頁。
- 33 *Sixteenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church* (1898-1899), pp.10-11. (青山学院資料センター所蔵)
- 34 *The Minutes of The Tenth Session of Woman's Annual Conference of The Methodist Episcopal Church in Japan* (1893), p.29. (青山学院資料センター所蔵)
- 35 チャペル夫人は女性宣教師として派遣されたメアリー・ホルブルック (Mary Holbrook) のことである。1890年にメソジスト宣教師のベンジャミン・チャペルと結婚後、宣教師夫人として活動した。(齋藤前掲書、195頁)。
- 36 *Sixteenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church*, p.90. *Seventeenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church* (1899-1900), pp.54-55. (青山学院資料センター所蔵)
- 37 *Sixteenth Annual Report of Japan Woman's Conference, Methodist Episcopal Church*, pp.82-83, p.86.
- 38 青山女学院校友会『会報』第30号（1925年7月）、42頁。
- 39 鵜飼猛編『開教五十年記念講演集 付祝典記録』（宣教開始五十年記念会事務所、1910年）、鈴木範久監修『近代日本キリスト教名著選集 第三期 キリスト教受容史篇18』（日本図書センター、2003年）、236頁。
- 40 同上、228-230頁。
- 41 鈴木美南子「解説 創立から関東大震災まで」フェリス女学院150年史編纂委員会編『近代女子教育 新学制までの軌跡—学校要覧・認可申請書—』（学校法人フェリス女学院、2012年）、131頁、137頁。青山女学院高等普通科は1908年5月に指定校認定を受けている。
- 42 鵜飼編、前掲書、238頁。

- 43 同上、239頁。
- 44 *World Missionary Conference 1910; Report of Commission III, Education in Relation to The Christianisation of National Life* (Edinburgh and London: Oliphant, Anderson & Ferrier, and New York, Chicago, and Toronto: Fleming, H. Revell Company), p.164.
- 45 柴沼晶子「英国留学で得たもの—安井てつと大江スミの場合を比較して—」『敬和学園大学研究紀要』第8号(1999年3月)、258頁。
- 46 青山さゆり会編、前掲書、311-312頁。
- 47 拙稿「基督教女子教育会とキリスト教連合女子大学運動」キリスト教学校教育同盟百年史編纂委員会編『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』創刊号(2003年6月)、24-27頁。
- 48 平塚益徳編著『人物を中心とした女子教育史』(帝国地方行政学会、1965年)、125-129頁。
- 49 太田雅夫「本郷教会の人びと—会員原簿を中心に—」同志社大学人文科学研究所編『「新人」「新女界」の研究—二〇世紀初頭ジャーナリズム—』(人文書院、1999年)、202-205頁。
- 50 青山女学院校友会『会報』第38号(1934年12月)、109頁。(青山学院資料センター所蔵)
- 51 塚本はま子「家庭教育」外村義郎編『基督教家庭講演』(基督教伝道義会、1918年)、11-13頁。(青山学院資料センター所蔵)
- 52 同上、19頁、21頁。
- 53 塚本はま「女学生と新聞雑誌」『婦人公論』第5年第7号(1920年7月)、31-32頁。(青山学院資料センター所蔵)
- 54 青山女学院校友会『会報』第19号(1916年4月)、65-67頁。(青山学院資料センター所蔵)
- 55 青山女学院校友会『会報』第38号、108頁。
- 56 青山女学院校友会『会報』第44号(1941年12月)、55頁。(青山学院資料センター所蔵)
- 57 Robert, *op.cit.*, pp.130-137.
- 58 平塚編著、前掲書、131頁。
- 59 Robert, *op.cit.*, pp.287.
- 60 高崎前掲論文、253頁。
- 61 拙著『成瀬仁蔵の婦一思想と女子高等教育—比較教育文化史的研究—』(東信堂、2019年)、122-123頁。

(付記)

本稿の執筆にあたり、アメリカメソジスト派の女性伝道事業について、デーナ・ロバート氏(ボストン大学教授)にご教示を賜りました。また、史料の閲覧・収集について、青山学院資料センター事務室の方にご高配をいただきました。ここに記して、感謝します。